

震災報道 未来考える

災害とメディア研究 仙台で研修会

宮城県内の新聞や放送の記者、行政関係者、若手研究者らでつくる「みやぎ『災害とメディア』研究会」が

22日、仙台市青葉区の河北新報社で「震災・災害報道のあすを見つめて」と題して研修会を開いた。メンバ

ー約40人が参加し、東日本大震災から11年2カ月が過ぎた被災地での取材の在り方について考えた。

大川小6年だった次女みずほさん(12)を亡くした大川伝承の会の佐藤敏郎さん(58)が講演。これ

まで取材を受けた立場から、佐藤さんは「端的でキヤッチーな言葉は独り歩きすることもある」と、印象の強い言葉の影響力の大きさを指摘した。

「被災者や被災地にも3・11前の人生や物語がある」と、震災前の地域や暮らしにも目を向けるよう促す一方で、今後に向けて「記事や放送がどんな未来につながるのか考えて報道して

道が続けていきたい」と述べた。河北新報社報道部の吉田尚史記者(47)は「証言を拾い上げ、記録することが今後の災害への教訓にもなる」と強調した。

研究会は、宮城県内の産学官民と報道機関の連携組織「みやぎ防災・減災円卓会議」の派生組織として2018年1月に設立された。新型コロナウイルスの感染拡大で、20年2月を最後に活動を中断していた。



大川伝承の会の佐藤さんの話を聞く参加者(22日、河北新報社)